

図書館だより



No. 9

平成30年1月30日



遅くなりましたが、みなさん、2018年も図書館をよろしくお願ひいたします。

今年もたくさんの本と出会い、心を豊かに、世界を広げてください。図書館はそのお手伝いを全力でしていきます。本について語り合ったり、しおり作りなど季節ごとに行う制作に精を出したり、図書館で過ごす時間を存分に楽しんでください。卒業まで残りわずかとなった3年生も読み残しのないよう図書館へ通ってくださいね。

さて、新年、みなさんは神社やお寺で、おみくじを引きましたか。参拝に訪れた際に、お守りや御朱印と並んで、目がいってしまうおみくじ。自分の運勢は今後どうなるのかなど気になって引きたくなります。最近は、恋のおみくじや干支おみくじ、血液型おみくじなんてものまであるくらいおみくじの種類も豊富で、どれを引くかを決めるところから迷ってしまいますよね。どんな運勢でもしっかり精進して吉へと運気を上げていきましょう。今年もよい年となりますように！

*おみくじって楽しい

176-カ 『ニッポンのおみくじ』 鎌木 麻矢 || 著 グラフィック社

おみくじのルーツや種類、吉凶の内容、引き方から始まり、全国の様々なおみくじが232種類も紹介されています。ベーシックなおみくじはもちろん、鹿やきつね、うさぎなど、その土地と縁のあるマスコットのついたおみくじ、ニューウェイブを感じる個性的なおみくじ、とその種類の豊富さには驚くばかりです。埼玉からも秩父の銭神 聖神社の金みくじが紹介されていますが、みなさんは金運に特化したこのおみくじを知っているでしょうか。

「このおみくじを引いてみたい！」そんな思いに背中を押されて、全国各地へ旅に出かけてみるというもよさそうですね。今まで以上におみくじを引くのが楽しみになる本です。

*バレンタインもクックパッドさまざま

596.6-ク 『クックパッドの大絶賛レシピ[決定版]お菓子』 KADOKAWA

料理の強い味方クックパッドは、バレンタインにも大活躍です。量産にぴったりなクッキーやパイのレシピから、大切な人に贈るのにおすすめなケーキ(ダブルチョコレート・チーズケーキがとておいしそうでした!)のレシピまで、たくさんのレシピが揃っています。チョコレート菓子を作るつもりで眺めていたのに、気がつくと、スフレフロマージュやふわふわメレンゲレモンパイなど、バレンタインに関係ないそのお菓子のレシピにも心を惹かれてしまいます。バレンタインのお菓子作りが一段落したら、その他のお菓子作りも楽しんでみてください。

🐾 戌年だから読みたいこの本 🐾

さて、今年の干支は「戌」です。ここで少し12年前の戌年にベストセラーとなった本を振り返ってみると、『国家の品格』(藤原正彦 || 著)、『ハリーポッターと謎のプリンス』(J. K. ローリング || 著)、『東京タワー』(リリー・フランキー || 著)などが上位にきていました。一方、秋草の図書館の貸出ランキングでは、壮絶な実体験を元に書かれた『あおぞら』(星野夏 || 著)が第1位、第2位以降を川越在住の著者が書いた、へなちょこ高校生が異世界へワープし、なぜか魔王になる『今日から㊤王』シリーズが独占した年でした。さて、今年はどうな本が話題を呼ぶでしょうか。ここでは“戌”にちなんだ本を紹介します。

159-ミ 『人生はワンチャンス!』 水野 敬也/長沼 直樹 || 著 文響社

65匹の愛らしい犬たちが教えてくれる人生に大切なこと。

犬好きにはたまらないショットが満載で、見ているだけで、自然と口角があがって笑顔になります。ページの裏には、犬たちの教えてくれた大切なことにまつわる偉人たちのエピソードと名言がそれぞれ紹介されています。『幸福だから笑うのではない、笑うから幸福なのだ』(アラン フランスの哲学者)、『本当に大事なことで、格好つけたままやれることは一つもない』(ノーマン・メイラー 米国の作家)など、多くの名言と出会えますが、みなさんの心には、どの人のどの言葉がグッとくるでしょうか。

726-シ 『悩んだときに元気が出るスヌーピー』 チャールズ M. シュルツ || 著
谷川俊太郎 || 訳 祥伝社

世界中で愛されているスヌーピー。彼は犬小屋の屋根で空想にふけるのが大好きなビーグル犬です。彼の飼い主、チャーリーブラウンは、いつも何かにやきもきしたり、悲観したりしていますが、そんな時もスヌーピーはいつもと変わらない様子でただそばにいます。彼らやピーナッツの仲間たちの会話には元気になるための明確な答えが提示させているわけではありませんが、そっけないように感じる言葉が気づくと不思議なことに心を軽くしてくれています。わかりやすい即効性はないかもしれませんが、じんわりと効いてくる分、長く心に留まり、気持ちを上げてくれます。

913.5-タ 『現代語訳 南総里見八犬伝 上 下』 曲亭馬琴 || 作 白井喬二 || 訳

曲亭の本姓は滝沢。滝沢馬琴の“八犬伝”といえば、思い当たる人も多いのではないのでしょうか。歌舞伎や浄瑠璃などの古典芸能だけでなく、ドラマやマンガ、アニメやゲームなどでも目にすることがあるはずです。もとは江戸時代の読本(よみほん)で、超自然的な怪異なども書かれている伝奇小説なので、自由な発想で翻案されることが多いようです。一度、大元になった原作を読んでおくのも楽しいと思います。犬塚信乃、犬山道節、犬川荘助、犬飼現八、犬坂毛野、犬田小文吾、犬江親兵衛、犬村大角ら八犬士が、それぞれの因縁により集まり、力を合わせて里見家を守る壮大な構成の物語は、時代を超えて私たちに惹きつけます。そして、犬の八房に秘められた前世の因縁とは…。

日本の誇れる文豪たち～おさえておきたい重鎮作家編～

日本の誇れる文豪たち、三学期は「おさえておきたい重鎮作家編」です。その一人目として今回、紹介するのは宮沢賢治です。

宮沢賢治は、二人の少年の切なく美しい夜空の旅を描いた『銀河鉄道の夜』、最後の一文が謎を残す『オツベルと象』、最愛の妹トシを亡くした悲しみを書いた『永訣の朝』など、多くの詩、童話を執筆した作家ですが、幼い頃から鉱物・植物採集、昆虫標本作りが好きで、「石コ賢さん」とあだ名もついていたのだそうです。そうした自然への興味も大きく、執筆をするかたわらで、東北の厳しい気候風土に立ち向かい、故郷岩手で農学校の教諭としても働いていました。また信仰の深い人でもありました。没後に手帳から見つかったメモ『雨二モマケズ』からも、実直な人柄が伝わってきます。



*宮沢賢治が紡ぐ心象風景

911-ミ 『宮沢賢治詩集』 宮沢 賢治 || 著 角川書店

詩集「春と修羅」の第1集から第4集(現在では、第4集は「詩稿補遺」という括り)が収録されています。農学校の教師を退職する時に書かれたという『告別』、妹トシを思い書いた『永訣の朝』や『無声慟哭』などは、何度読んでも心を揺さぶられます。宮沢賢治は生前、自分の書いたものは詩ではなく、心象のスケッチと述べたそうですが、幻想的な風景が次々と浮かんでくる『冬と銀河ステーション』、己の内にある暗さが春の情景との対比で組み込まれた『春と修羅』、農業へかけた熱意が伝わってくるような『和風は河谷いっばいに吹く』など、作品の一つ一つから彼がその生涯で思い、感じたものが確かに伝わってきます。また、宮沢賢治だから生み出したのであろう言葉の数々は、目で追うだけではなく、声に出して読むことでおもしろさや深みが増します。試してみてください。

*オノマトペが楽しい

913.6-ミ 『注文の多い料理店』 宮沢 賢治 || 著 新潮社

生前唯一の宮沢賢治童話集『注文の多い料理店』全編と、「雪渡り」「茨海小学校」「なめとこ山の熊」など、童話 19 編が収録されています。

何度も読んだり、読み聞かせてもらったりしたことのある馴染み深い物語もありますが、子どもの頃に読んだ時とはまた違う感じ方で、童話の世界に思いを馳せ、楽しむことができます。宮沢賢治の書く童話が持つ優しさ、美しさ、登場人物たちから伝わってくる瑞々しさには心が洗われます。

「凍み雪しんしん、堅雪かんかん」(『雪渡り』)、「ドッテドッテ、ドッテド」(『月夜のでんしんばしら』)、『赤革の靴もキッキッと鳴ったのです』(『土神ときつね』)など、物語を彩る独特のオノマトペの響きにも注目して読んでみてください。

*宮沢賢治の理想と願いがここに

E-ミ 『グスコブドリの伝記』 宮沢 賢治 || 著 氷川 あさみ || 絵 リトルモア

イーハトーブとは宮沢賢治が岩手県をモチーフにして心の中に描いたとされる理想郷であり、この物語はその地を舞台に描かれています。イーハトーブの森で生まれた少年グスコブドリと彼の家族は、不作による飢饉でバラバラになってしまいます。ひとりぼっちになったグスコブドリはあちこちを転々としてますが、その都度、噴火や日照りなど自然の猛威が人々の生活を脅かすのを目の当たりにします。自分たちのように悲しむ家族がでないようにと、教養を身につけ、挫折を繰り返しながら、自然に立ち向かっていきます。

挿絵を手がけたのはアーティスト清川あさみさん。刺繍がほどこされた美しい挿絵が絵本の中いっばいに広がり、宮沢賢治の理想郷を忠実に描き出しています。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

昨年、第54回文藝賞を史上最年長で受賞し、63歳で小説家デビューを果たした若竹千佐子さんの『おらおらでひとりいぐも』(913.6-7 河出書房新社)を読みました。今月発表された第158回芥川賞に見事選ばれ、さらには書名が宮沢賢治の『永訣の朝』の一文であり、ここで紹介するのにぴったりの旬な本です。

主人公は、ひとり暮らしの桃子さん 74歳。いつの間にか祖母と同じ手になってしまった自分、家の中にあるのは自分とねずみの気配だけ。いつまで動けるのかという不安、会話のない生活のさびしさ、そうしたものに押し潰されそうになりながらも、桃子さんは生きることへの希望やおもしろさを失いません。東北なまりの独特な語り方が印象的なのと、まだ遠い先と思っていた老いが他人事でないという実感が湧きおこってくるので、若者が読んでドキッとするようなストーリーです。まだまだこれから、と桃子さんのようにたくましく人生を歩める年の重ね方をしたいものだなと思いました。 【今井】

話題の絵本、『えがないえほん』B・J・ノヴァク さく(E- 早川書房)を読みました。題名の通り、絵は一切ありません。しかも、物語らしいお話もありません。そして注意として、声にだして読むこと、とあります。これは、子どもに読み聞かせるための絵本だからです。そうして読み手は、本自体にではなく、大爆笑する子どもを見て癒されるのです。これは、“おはなし会”にぴったりの絵本ではないですか！

とはいえ、図書委員会のやっている“おはなし会”のコンセプトは、大人が楽しめるおはなし会です。『平家物語』や『ハムレット』など女子高生やそれ以上の年齢を対象にしたものに取り組んでいます。可愛らしく“おはなし会”とは言っていますが、聞きに来て、読み手として参加しても、勉強になるし、噛みごたえのある“おはなし会”となっています。う～ん、この絵本は純真な子どもたちに読み聞かせてみたいですね。子ども、子ども、ああ、どこかに子どもはいないものかしら？ 幼保コースで子どもと触れ合う機会があったら、ぜひ試してみてください。子どもたちをどれほど楽しませられるか、私に教えてください。 【鈴木】

